緋色の月

北城 十

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緋色の月

【Ｎコード】
Ｎ２３２８Ｂ

【作者名】
北城　十

【あらすじ】
荒廃した街、殺しを生業とする吸血鬼・レヴェットが、自分と似た境遇を持つ幼い少年・コールを拾ったことから、人間や自らの生き方への考えを見直していく。

第一夜　廻り

星も月も、地上の暗さなどものともせずに輝く夜。近頃は夜通し人を誘う建物の明かりで薄らぐことの多い小さな夜の火も、その日は冴えて煌めいていた。

コンクリートの高い壁の間を、闇に浮く金糸の髪は帽子に隠し、夜闇に紛れる黒のコートをはためかせ進んだ。密に張り巡らせた電線の、月明りに影となるシルエットが金属の美しさにも似た美を持ってレヴェットの目に映った。

汚い汚いと文句を言いながら、やはり心打たれるものがこの世にはある。自分がいくら壊したところで、この世が損なわれるようなことなどないのだろう。

日々の糧を手に入れるために始めた殺し屋稼業も、いつのまにか板に付いてしまっていた。隠れて気配を殺すのはもともと慣れたものだったし、殺せば金が手に入る。そして、なによりも血が手に入る。レヴェットには血が必要なのだ。彼は血を糧に生きる生き物だから。依頼されたターゲットを殺し、その血を啜った。

今日も。

月の世界にしか生きられない、訳ありな彼が安心して暮らすには、同じように訳ありな者の中で他と深く交わらずにいるのが一番だった。孤独だけがレヴェットの心を刺す。罪悪感は湧かなかった。それは生きるためであり、彼がそれまでに受けてきた数々の冷酷な仕打ちに対する復讐の意味も含んでいたから。自分が孤独であり続けなければならないことへの、悲しい怒りの思い。

帰る道を急ぐ必要はない。帰りを待つ者もいなければ、追手もいない。月の仄かな明かりの中、涼しくはあるがどこか熱気と湿り気を帯びた風を感じながら、レヴェットは孤独な夜を歩いていた。

人影がある。

寝こけた酔っ払いが路上でノビていることはしばしばあるので、

道端で人影を見つけるのはおかしなことではない。しかしその人影にレヴェットは心を奪われた。
酔っ払いではない。傷ついた少年の体。人形のように手足を投げだし、不衛生な地面に座り込んでいる。
何か得体の知れない物が胸を締め付ける気がした。レヴェットにはその少年に声をかけないでいることはできなかった。見えない糸で操られているかのように、もしくは敷かれた道が一本しかなかったかのように。そうなる未来以外自分には用意されていないように感じた。

「君は、何をしてるの？」

馬鹿らしい質問だ。この状況では座っているのに、たいした意味などないだろうに。
レヴェットには幸運なことに、少年はその声に反応した。ゆっくりと少年がレヴェットの顔をとらえる。本当にまだ幼い顔。六・七歳くらいであろうか。

「……待ってるんだ」

その答えにレヴェットは微かな胸騒ぎを覚える。どこかで聞いた。同じことを言う声を、彼はどこかで聞いたことがあった。

「……誰を？」

少年は答えず、俯いた。指先を擦り合わせるのは寒さのためなのか、迷いの表れなのか。それは分からなかったが、ただ少年は俯きその指先を見つめていた。
その光景が何かに重なる。かつて同じ受け答えを聞いた。それは大切な思い出であるはずなのに、思い出すことができない。

朝も夕も遠い闇の中で、少年の髪は鮮血の色で輝いている。それでも夜の似合う顔は、やはり孤独の色を滲ませていた。

「……でもいいや。もう諦める」

少年は何かを棄てたように力無く言った。

「何故？」

「待ってるのは馬鹿だから」

「じゃあ探そう。僕と……」

『じゃあ探そう。俺と』

少年は探るようにレヴェットの紫の瞳を見つめた。レヴェットがかつて黒い男にしたように。

少年の目はキラリと輝けば銀にも見える灰色で、小さな二つの星のようであった。

「一緒に？」

「そう」

答えながらレヴェットは少年の体を抱き上げた。軽く、骨張った体。小さく、はかなく、愛おしい者。

何の疑念も抱かず、ただ一心に見つめる瞳が欲しかったのだといつか言われた。

少しずつ形をなしてゆく記憶に戦慄した。

「名前は？」

しばし悩むような間があった。それでも、少年も同じ選択をする。

「……コール」

『名前は？』

『……』

思い出す、憎むべき大切な人。

同じだった。

『レヴェット……』

同じ廻りでも、行く先は変えるから、とその細い体を抱き締める。

傍にいると。

そんな言い訳の中、レヴェットは黒い男の影を見つめていた。

第二夜　歩み

ひび割れた窓から冬の近付く寒気が流れる。レヴェットには平気でも、この薄着の痩せぎすには耐えられないだろう。

少し前のある夜、仕事帰りに拾った赤い髪の少年。コールと名乗った。それ以外は何も知らないし、知る必要もないと思う。

傍に置くのは唯一レヴェットの孤独を癒やせる存在だからだ。コール以外では意味がない。あの夜、あのようにして出会ったこの少年でなければ駄目なのだ。だから、その他にはどんな情報も意味がない。あったところで何も変わらない。

だがその考え方がいけなかったのであろうか。会話の少ない二人はいまだよそよそしい。レヴェットは一人で生きるのに慣れ過ぎて、どう接していいかわからなかった。

また発作が出始めた。血液を摂取しないでいると起こる喉の渇きと破壊衝動。彼にとっての血液は麻薬に似ていた。頻繁に摂取すると発作の間隔が短くなっていくのだ。殺しを始めてレヴェットは簡単に血液を手にいれられるようになり、必要以上に頻繁に血液を摂取してしまった。それだけ発作の頻度も高い。

コールを拾ってから仕事を休んでいたが、もうじき再開しなくてはならないようだ。なぜか微かに後ろめたい気持ちが湧いた。

「コール、寒くないかい？」

明らかに震えているのを分かっていながら聞いた。コートを買って来ようと思いながら、きっとそれも尋ねるのだろうと思った。

コールはゆっくりとレヴェットを見る。探るような目がコールの戸惑いを教えるようだ。コールは控え目な性格なようで、レヴェットに何かを求めようとしなかった。だから言わせたいと思ってしまう。望みを聞きたいのだ。

「寒くない。大丈夫だよ」

ぶるぶると震えているというのに、コールは頑として寒いと言わない。

レヴェットは少し苛立ちながらコールを見つめた。コールはレヴェットから目をそらし、抱えた膝頭を見つめて縮こまっていた。

「コール、冬が来る。お金をあげるから、明日何か着る物を買ってきな」

どうしても見ていられず、レヴェットはなんとかそれだけ言った。

「いらない、もったいない」

「冬の厳しさなら、十分理解しているだろう？　凍えて死ぬ」

コールは賢いはずなのに、何故か不思議な所でおかしな事を言う。今のレヴェットにはとうてい理解のできないような事を言う。かつてのレヴェットも同じ事を考える事があったはずなのに、立場が変わった今はもう理解できない。それは昔の彼なら理解し得たことだったのに。

「傍にいて、コートに入れてくれたら凍えないよ」

それは不安と、咎めの言葉。どうして行った先でする事を知ったのか、レヴェットは不思議に思ったが、そんなことは本当はどうだってよかった。考えるのを先送りにしている。　コールと暮らす事を決めた今、ただ気の向くままに生きる事はもうできない。人を殺して生きる人間を恐れるだろう、嫌うだろうコールと、今のままではいられない。かといって今の職を離れてやっていけるものなど見

つからない。咎める声を聞いても、簡単にそれを捨ててしまうことはできなかった。
レヴェットが考え込み沈黙が流れると、コールがそっとレヴェットのコートに潜り込んだ。コールの体はすでに冷えていた。
「駄目だ。これじゃ身動きがとれないよ。今から一緒に買いに行こう」
「……」

コールの目がレヴェットの目を見つめた。不安に陰る色は嫌いだ。その目を見てやっとレヴェットは幼い日の自分を思い出した。
まだ疑ってしまう隣の存在。ただ少し離れただけで捨てられたのではと不安にかられた。自分を養いながら危険に身を置くその男を、何度も恨めしく思っていた。
しばらく仕事をしなくても、楽々暮らしていける貯えはある。血は何とか他の動物で済ませればいい。
レヴェットはコールのために仕事を辞めたいと思った。傍にいて、たくさんの事を教えて、コールを闇に染めないように。 彼の瞳には魔力があるのかもしれない。そうやって力無い自分を生かしてきたのかもしれない。それならば自分の物にもあったのだろうか。あの男もしばらくして仕事を辞めた。
同じにはなりたくないと思いながら、自分の行動は限りなく彼に似ている。いっそ笑えるくらいに。
レヴェットは思わず苦笑しながらコールを抱き上げた。驚いたコールがきつくレヴェットの首に腕を回す。
「一緒に行こう」

レヴェットの表情を見て、微かにコールが笑った。

「……分かった」

ほんの少しだけ近づけたような気がした。コールは小さなレヴェットの鏡だった。捨ててしまったものを、拾い集めてきてくれたようで。

第三夜　平和の明日

星空を歩いて小さな店に。小さな子どもと黒ずくめの青年の組み合わせは、店の者の注意を引くだろう。それでもレヴェットには全く気にならない。もう目立ったところで仕事に支障がでると焦る必要がないから。

レヴェットは完全に殺し屋から足を洗った。

辞めてみるとそれはかなり楽な生活だった。鳥や鼠くらいであれば毎日捕まえる事ができるので血の心配もいらず、今までに貯めた金は二人で生活していくには十分過ぎるほどだった。悩んでいた事が馬鹿らしく思えるほど幸せで平和。張り詰めていたレヴェットの心も徐々に安らいでいくようだった。

暗い路地裏の落書きだらけのビル。ドアを開けるとまず、幅の狭い階段が青いライトの中を下っている。その突き当たり、「Ｂｌｕｅｂｉｒｄ」と書かれた黒いドアの先が目的の店だ。レヴェット達の入った入口からはこの店にしか入れない。その他の階とは完全に切り離されているのだ。

ドアを押すと静かにベルが鳴った。店内は暗く、設置された証明は全て落ち着いた青で統一されている。青い鳥が飛ぶ空というより、眠りについた海の底のような趣があった。

フロアには黒い金属製の丸いテーブルとイスが置かれ、右手はカウンター席になっている。中にいた銀髪のバーテンがレヴェットに気付き、笑みを浮かべた。

「ああ、いらっしゃいレヴェット」

レヴェットはコールに気を配りながら真っ直ぐにカウンターへと向かう。コートはそのままに、習慣で髪を隠すように被っていた帽子だけを脱いだ。高い位置で縛った金糸の束が、さらりと背に落ち

る。

「高いのはいらない」

「ケチだね。体に良くないぜ」

文句を言いながらバーテンはケラケラと笑った。そしてその店で一番安い、得体の知れない青い酒をフルート型のシャンパングラスに注ぐ。とことんまでに青が好きな店だ。

レヴェットはコールを抱き上げイスに座らせ、自らもその右手のイスについた。

コールを拾ってから初めての来店であるはずなのに、バーテンは驚いた様子も見せずいつもどおり接客する。彼がこの辺りで一番の情報通であるという噂は本当かもしれない。

このバーテンの名はエルダー、レヴェットに殺しの依頼を仲介していた男だ。幼い時から付き合いがあり、それほど仲がよいわけではないが、レヴェットにとって唯一の友人と言えた。

今日この店を訪れたのはこのエルダーに呼ばれたからだ。レヴェットにはわざわざ店に足を伸ばす理由はなかったのだから、来たからといって大金を落として行く義理はない。

「そっちのガキには？」

「ここに酒以外あるのか？」

「大丈夫。準備しといた」

エルダーの準備のよさにレヴェットは呆れた溜息を漏らした。自分で呼んでおきながら大した商売根性である。

頼んでもいないのにオレンジジュースを注ぎ始めたエルダーに、レヴェットは表情を硬くし招いた理由を尋ねた。知りたいのはその事だけだ。

「ああ、呼び出した理由ね。薬屋街の万屋が後継を探してる」
「それがどうした」

あまりにも自分に関係のない内容に、レヴェットは眉間に皺をよせる。

薬屋街は、かつて主に麻薬取引に使われていた路地で、今では麻薬に限らず、様々な表に出しにくい物品が売り買いされている。万屋は、そこでいわく付き商品の仲介取引や目利きなどをして稼いでいる店だ。似非骨董屋や闇市などとも呼ばれ、白髪の老人が一人きりで切り盛りしていた。

「お前にどうかと思って」

無言のコールの前に無造作にオレンジジュースの入ったグラスを置きながら、エルダーはニヤリと笑って言った。コールがビクリと震えたのを見てレヴェットはエルダーを睨む。

「どうしてそうゆう話になるんだ」
「今職無しだろ、丁度いいかと思って。万屋のジジィに紹介しろってせがまれてな」

確かに職は無いが、金に困っているわけではなし、コールのことを考えるとあまりきな臭い職には就きたくなかった。

万屋は長きに渡り信頼を勝ち取ってきた業界のドンだが、その信頼はひとえに店主・満爺の機転と才覚に依るものだ。危険な客、商品ばかりが集まる万屋のこと、満爺の保護を確実に得なければレヴェットにもコールにも未来はない。

しかしそのかわり、晴れて満爺に後継と認められればこの街において恐れるものなどなくなるのも事実だ。まともな職になど就けるわけもないレヴェットだ、この話を簡単に蹴るのは得策ではないか

もしれない。

「一度話をしたい。それからでは駄目かと聞いてくれないか」
「あぁ、ジジィはもうお前を視察済みだ。きっといいように取り計らってくれるさ」

そうであればいい。万屋の後継となれたならば、コールの安全は保証されるのだから。
いつか見た万屋の小さく薄明るい店を思い出した。あそこでコールと二人、喧騒から逃れて暮らせたらいい。何でも好きな物を買い与え、レヴェットに心を開ききって笑ってくれるように。

「さっきはすまない。紹介感謝するよ。いつも悪いな」
「いやぁ、これも仕事だからね」

どこまでも軽いエルダー。それでも今日はその軽さが親密さのように思えて好ましい。
コールを見つめる。銀の星に、これからの計画を話そうか。ずっとという言葉の真実味に彼が少しでも喜んでくれるよう、レヴェットは願ってコールの髪をすいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2328b/

緋色の月

2010年11月17日03時07分発行